

キリストは神か

——ヘブライ 1 章 8～9 節の解釈をめぐって——

川 村 輝 典

序

先頃 (1996. 2. 20) 岩波書店から出版された『新約聖書』V の 83～131 頁に亙って、上智大学の小林稔氏が「ヘブル人への手紙」の大変すぐれた翻訳と注を発売された。新共同聖書が委員会訳であるためにかなり翻訳者の意向が無視され、また曲げられるという苦汁をなめたのに対して、このシリーズは各翻訳者が自由に訳しておられ、小林氏もまたその特権を遺憾なく行使され、全体としてすっきりした形になっていることは、誰しも認めるところであろう。しかし、どのような翻訳であっても完全なものではあり得ないという例に洩れず、この翻訳もまた問題点を幾つか抱えていることは、否定できないところである。

今そのすべてを指摘することは断念せざるを得ないが、本論文の主題であるキリストの呼称の一つに属する「神」という点について、集中して取り上げたい。特に 1:8～9 を中心にして問題を展開してみたい。

小林訳によると、1:8 における詩編 44:7 の引用句 (LXX) は〈神があなたの玉座、いつまでも世々に。〉、というように、あなたの玉座ではなく、神が主格として訳されている。また、1:9 の詩編 44:8b の引用部分では、〈このゆえに神、あなたの神は、あなたに注いだ、歎びの油を……〉というように、神を主格とし、「あなたの神」をその前の「神」と同格として、つまり説明として訳している。

ここから明らかなことは、小林氏は、これらの詩編を引用するに当たって、ヘブル書記者はキリストを神と呼ぶことはせず、むしろこれを拒否しているゆえに、ここでイエスを神などと呼ぶようなことのないように、配慮してい

るということである。つまり、ヘブル書の記者は、イエスを神の子または大祭司と呼んでも、神とは呼んでおらず、したがって旧約聖書の引用に際してもこの点を守るべきである、との立場が貫かれている、といえるであろう。しかし、そのような配慮ははたして正しく、また理由のあるものと言えるであろうか。

また、小林氏は1:8の訳を決定するに当たって、「定本に従って訳した」と言われるが（上掲書86頁注15）、それは果たして正しい判断によるものと言えるのであろうか。たしかに、従来の圧倒的多数の訳を否定した上でのこの読み方は、もし正しいとすれば画期的なものと言うべきであろうが、はたして同氏の立場が客観的に肯定され得るであろうか。

この問題はヘブル書記者が旧約聖書(LXX)を引用するに際して、どのような意図をもってこれを行ったかという事柄に関わっており、特に当該箇所ではヘブル書のキリスト論に深く関わる神の子キリスト論を扱っている部分であり、そこではキリストを御使に優れたものとしているのであるから、かなり重要な箇所とすることができよう。それゆえ、この訳がヘブル書のキリスト論の立場から見て正しいか、また旧約(LXX)の翻訳として正しいかという、二重の視点からこれを検討する必要があるように思われる。以下、これを試みたいと思う。

I. 小林氏の立場を支持するもの

F. シュレーガー¹⁾は、Heb 1:8の $\delta\ \theta\epsilon\acute{o}\varsigma$ を主語とする立場の代表者として、B. F. ウェストコットを挙げている。ウェストコットによれば²⁾、この箇所の訳は〈あなたの王座は神である〉となり、その場合の王座は象徴的な意味に解されている。これに対してシュレーガーは、このような考えはわれわれの魂の憩の場として神に寄りかかるようなものだという、W. レオナード³⁾の批判を支持している。

われわれはさらに $\delta\ \theta\epsilon\acute{o}\varsigma$ を主語とする立場の一人としてJ. モファット⁴⁾を挙げたい。彼は $\delta\ \theta\epsilon\acute{o}\varsigma$ が主語または述語として主格であろうとして、〈神

はあなたの王座である〉, または 〈あなたの王座は神である〉 という訳を選び, このような訳が可能であるのは βασιλείας の後の σου (LXX) が αὐτοῦ (NB) に変えられたことによる⁵⁾, という。

これほど積極的ではないが, ὁ θεός を呼格とすることに反対の人たちがいる。まず最も新しいところでは, マイヤー注解叢書で O. ミヒェルの後ヘブル書を担当している H. F. ヴァイスが挙げられる⁶⁾。彼は一応 ὁ θεός を呼格とってはいるが, その後で次のように言うのである。《このことは全く, 先すでに 3 節と 4 節で「御子」の独自の尊厳さに対して導き出された結論に存するのであるが, しかしヘブル書の意味では, 父に対する子の従属性を排除せず, むしろそれを含むのである》。

これと似た発言をしているのが F. ビュクセルである。彼は《御子は神であるが, 神は御子の神である。御子の父であるのみでなく, 御子の神でもある》と言う⁷⁾。先のシュレーガーはこれを評して, 《彼はこのように述べることによって, おそらく (イエスの神性に) 制限を行っているのであろう》, という。シュレーガーは同様の立場を立つものとして E. K. A. リーム⁸⁾をも挙げている。しかし, 最近の学者でのこの説を支持する人はほとんどいない。

II. 小林氏の訳の問題点

1. LXX の翻訳の面から

ヘブル書 1:8 は詩編 44:7 (LXX) から引用されている。その本文は次のようである。

7 節 Ὁ θρόνος σου, ὁ θεός. εἰς τὸν αἰῶνα τοῦ αἰῶνος, ῥάβδος εὐθύτητος ἢ ῥάβδος τῆς βασιλείας σου.

8 節 ἠγάπησας δικαιοσύνην καὶ ἐμίσησας ἀνομίαν· διὰ τοῦτο ἔχρισέν σε ὁ θεός ὁ θεός σου ἔλαιον ἀγαλλιάσεως παρὰ τοὺς μετόχους σου.

これをヘブル書における引用句と比較すると, 次のような相違が明かにな

る。すなわち、引用句 8 節 (LXX 本文 7 節) では、*αἰῶνος* の次に原文にない *καὶ* が加わっている。また七十人訳とは反対に、最初の *ράβδος* に冠詞 *ἡ* がつき、後の同じ語にはそれがない。また *βασιλείας* の後の *σου* が、幾つかの写本 (D² Ψ 0278. 1881 *ml* vg^{cl}sy) では *αὐτοῦ* に変えられている。引用句 9 節 (LXX 本文 8 節) では、70 人訳がそのまま引用されており、両者の相違はない。

このことから、七十人訳聖書の引用句の翻訳を検討する場合、原文との相違点が一つのポイントになると考えられる。その場合、一番問題になるのは *βασιλείας* の次の *σου* が、かなり有力な写本において *αὐτοῦ* に読み換えられている事実である。

ヘブル書におけるこの読み方は、かなり有力な支持があるが (p⁴⁶ ~~SB~~), 同時にこれには問題点もある。なぜなら七十人訳本文では、*σου* という読み方は、第一に非常に多くの写本の支持があるということ (ADKP Ψ 33, 81, 1739, pc it vg sy^{ph} cop arm Tert. Chr. Cyr. Enthalius), 第二に直接の文脈の中で *αὐτοῦ* の意味にとることが困難だからである⁹⁾。つまり、この読み方に従うと、詩編の場合にはイスラエルの現実の王の一人ととらざるを得なくなり、前半の句と矛盾することになる。また 9 節で *σου* が保持されていることから、8 節の *σου* の確かさが保証される。それゆえ、*αὐτοῦ* は多分転写上の誤りであろう¹⁰⁾。

そこで小林氏の訳は、この誤って転写された *αὐτοῦ* に影響されたとするならば、一応筋が通る筈である。その場合には、*αὐτοῦ* は玉座を表わし、玉座の支配の筈が公正の筈ということになる。ところが、小林氏はこの部分で *αὐτοῦ* ではなく *σου* という読み方を採用しているのであるから、問題は複雑になる。この小林氏と同じ立場をとっているのが J. モファットであるので、われわれの小林氏批判は同時にモファット批判になるであろう¹¹⁾。

2. 他の引用句との比較

われわれの箇所と同様の問題は、10:7 の場合にも存在する。ここでは、キリストが父なる神に対して語られたものとして、七十人訳が引用されている

ので、 $\delta\theta\epsilon\acute{o}s$ は当然父なる神を指しているのである。問題は、小林氏がこの $\delta\theta\epsilon\acute{o}s$ を氏のいわゆる定本 (NA27 版, UBS4 改訂版) の読み方に反して「神よ」と呼格にとりながら、しかもその点について注に何の断わり書きもしていないことである。これは些が奇妙なことのようと思われる。

先には、1:7 の $\delta\theta\epsilon\acute{o}s$ を呼格ととらないのは UBS 第三版の読み方を否定するからだと言っているのに、10:7 では NA 第 27 版や UBS4 改訂版の読み方に反して、あえて呼格を採用しているのは、理解に苦しむところである。もしここでこのような読み方が可能であるならば、1:8 においても同じ読み方ができた筈ではないであろうか。これでは、1:8 においてキリストを神と呼ぶことをしないために、ことさらに $\delta\theta\epsilon\acute{o}s$ を呼格とすることを避けた、と言われても仕方ないのではないであろうか。

3. 神は玉座と呼ばれるか

$\theta\rho\acute{o}\nu\omicron>s$ は王座、玉座と訳され、古代ギリシャにおいては複数形で王権と支配の言い換えの表現として用いられた¹²⁾。旧約でも力、支配という意味に用いられている¹³⁾。新約では黙示録に多く用いられるが、それは支配者また審判者としての神の座を表わすものとされている。たしかに旧約でも新約も神の支配、主権を表わすのに用いられているが、その場合でも神そのものが玉座と呼ばれている例は全く見当たらない。それゆえ、1:8 の小林氏の訳はかなり無理があると言わねばならない。

III. キリストは神か

このような問いを提出するのは、ヘブル書の記者が当然イエスを神と認めている、という前提に立っているからではない。むしろ、これまで扱った問題を契機として、ヘブル書のキリスト論を検討して見たいからに他ならない。本書のキリスト論は、神の子キリスト論と大祭司キリスト論という二つの面から扱うのが通例である¹⁴⁾。

この二つのキリスト論は本書全体に互って交叉的に現われているが、一応大きく区分けするならば 1~2 章は主として神の子キリスト論、4:14~

10:18において大祭司キリスト論が展開されているが、すでに2:17にはキリストが大祭司として描かれており、またキリストを神の子と言っている例は10:29にまで及んでいる。そして、この両方のキリスト論が同時に扱われているのが4:14に他ならない。ヘブル書にとってイエス・キリストとは、大祭司であり神の子にいます方、あるいは、さらに正確には大祭司とされた神の子なのである。さて、これらのキリスト論をさらに分析し、本書の記者がどこまでキリストの神性について述べているかを検討しよう。

まず、神の子キリスト論に関わる部分から幾つかの箇所を取り出してみたい。

1. 神の子キリスト論から

1:3a 〈御子は神の栄光の反映、神の本質の完全な現われ〉

「神の栄光の反映」と「神の本質の完全な現われ」という表現は、どこまでキリストの神性という面を言い表しているのだろうか。

ここに用いられている *ἀπαύρασμα* とは、「反映」、「反射」、または「放射線」とも訳せる語であって、父なる神とキリストとの関係を、いわば太陽の光源と光線との比喻で表現したものである。光源と光線とは機能的には分けられるけれども、本質は一つであり、光源がそのまま運動しているものと考えられる。また *χαρακτήρ τῆς ὑποστάσεως* とは、神の本質をそのまま再現したものであるという意味であり、したがって、両方の語によって言われていることは、先在のキリストがまさに神そのものである、ということに他ならない。

1:3d 〈天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになられました〉 cf. 8:1, 10:12 (「永遠に」が付加される)

この句は詩編110編に基づいてなされた、著者によるキリストの高挙に関する記述である。この高挙の記事が行伝(2:33, 5:31)やパウロ(フィリピ

2:9)におけるキリスト昇天の記事と最も異なるのは、昇天(高举)を生ぜしめる方が父なる神ではなく、キリスト自身であるという点である。

イエスが父なる神の右の座を占められたということは、彼が王また主として即位された、ということである。つまり、イエスは地上にけるその救いの業を終えて、天にあって永遠の支配を開始されたのである。ヘブル書の中でイエスを主と言っている例は、引用句を除いて7回見られるが、王と言っている例はない。しかし、天の父なる神の右の座に着かれたことは、彼がフィリピ2:10と同じ意味で主であり、同時に天的な王であることが実現したということである。

しかし、それならばイエスが主であり王であるということは、そのままイエスが神であるということの意味するのであろうか。E. ローマイヤー¹⁵⁾はヘブライ1:1以下をフィリピ2:5~11と対比しつつ、こちらの方がキリスト論的にさらに厳密化されているとし、ここには「神と同等性の思想がより厳密に規定されている」と主張する。

しかし、この「神と同等性の思想」とか「子の神的性質」という表現を、そのまま素直に「イエスは神である」という意味に受け取ることができるであろうか。さらに他の箇所を検討しよう。

2:10 <というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全なものとされたのは……> cf. 12:2

「創始者」(*ἀρχηγός*)という語は新約全体で4回用いられており、専ら高举のイエスに対する称号として用いられている。また七十人訳聖書では9回用いられ、信頼される者、部族代表、頭、導き手などを意味を持っている¹⁶⁾。なお、12:2では地上のイエスが高举の主と同様の位置におかれ、信者をキリスト論的な信仰の実存において忍耐するように励ます、信仰の導き手とされている。これらにおいては、イエスはむしろ信者の側に身をおき、その先頭に立って彼らを導く者とされ、神としての面は隠されていると言える。

2. 大祭司キリスト論から

4:16 〈この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです〉

「罪を犯されなかったが」(*χωρίς ἁμαρτίας*)という言い方は、地上のイエスが限りなく人間の現実に近づかれつつも、なお彼らとは全く本質において異なった方であるということを示している。これこそヘブル書の記者が、消極的な形ではあるけれども、ある意味では最も強力に神的な性質を表現しているもの、ということができるのではないだろうか。真の神であられたからこそ、限りなく人間となることができ、しかもその罪から自由であることができた、と言えるであろう。

6:20 〈イエスは、わたしたちのために先駆者としてそこに入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです〉

ここで「先駆者」と訳されているのは *πρόδρομος* であり、*ἀρχηγός* と同様大祭司と密接に結び付いたキリスト論的な称号であるが、特に救われる者と運命を共にする者としての性格が強く現れている。

ただ、これらの称号との関連でヘブル書の記者が、イエスを神として言い表そうとしているということは困難であり、せいぜいその救済論的な面が強く現れているとしか言えないであろう¹⁷⁾。

7:24 〈しかし、イエスは永遠に生きていますので、変わることもない祭司職を持っておられます。それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しをしておられるので、御自分を通して神に近づく人々を、完全に救うこともおできになります〉

この中で「永遠に生きている」とか「変わる事のない祭司職」、「完全に救う」などの句は、イエスの神としての性格を表わしていると言えるが、「御自分を通じて近づく人々」というような部分は、神と人との間に立つ仲保者としての面こそ強調されているが、神とは区別された者というニュアンスが感じられる。

結 論

以上、神の子キリスト論と大祭司キリスト論の両面に互るヘブル書のキリスト的な表現を検討することにより、その中から少しでもそこにイエスを神とする考えが存するかどうかを調べて見た。その結果、大部分の表現はどちらかと言えば、神と人とを仲立ちするものとして、イエスを見ていると言えるようである。

しかし、このことはイエスをただ人間の側において見るということだけではなく、ヘブル書の記者はイエスの神としての性質を十分に認めつつ (cf. 1:2, 4:15), しかも罪人たる現実の人間との連帯に生きるイエスの面を強調しようとしているということに他ならない。それゆえ、イエスを神と呼ぶ句がこの書に含まれていたとしても、本書のキリスト理解を根本的に覆えしてしまうという結果にはならないであろう。むしろ、そのような表現がなされることにより、本書が強調しようとしているイエスと人間との連帯はますます生き生きしたものとなるに違いない。

それゆえ、本論文の課題である 1:8 の七十人訳聖書の引用句において、イエスを「神よ」と呼ぶ読み方を採用したとしても、少しもヘブル書全体にとって不都合なことはなく、むしろその方が本書のキリスト論にふさわしいと言えるのではないであろうか。

〔注〕

- 1) F. Schröger, Der Verfasser des Hebräerbriefes als Schriftausleger (BU 4), Regensburg 1968, 61, Anm. 5.
- 2) B.F. Westcott, The Epistle to the Hebrews, Grand Rapids, 1952 (=1892²).

- cf. H. F. Weiss, F. Büchsel, E. K. A. Riehm
- 3) W. Leonard, *The Authorship of the Epistle to the Hebrews*, Rom 1939, 364.
〈We could even conceive the idea of reclining on God as the resting-place of our soul, but who has ever thought of sitting on God as on a throne?〉
 - 4) J. Moffatt, *The Epistle to the Hebrews* (ICC), Edinburgh 1924, 13.
 - 5) *αὐτοῦ* と読む人々は F. W. Grosheide, C. Spicq, B. F. Westcott たちであり, その場合, *ὁ θεός* が呼格ではなく, 主格と取られるに違いない. cf. NEB/REB, JB.
 - 6) H.-F. Weiß, *Der Brief an die Hebräer* (KEK13), Göttingen, 1991, 166–167.
 - 7) F. Büchsel, *Die Christologie des Hebräerbriefes* (BFchTh 27/2), Gütersloh 1922, 22.
 - 8) E. K. A. Riehm, *Der Lehrbegriff als Hebräerbriefes dargestellt und mit verwandten Lehrbegriffen verglichen*, Basel-Ludwigsburg I² 1867, II. 1859.
 - 9) B. M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, London, New York, 1971, 622–63.
 - 10) W. L. Lane, *Hebrews 1–8* (World Biblical Commentary 47A), Dallas 1991, 21f.
 - 11) なお, この箇所の読み方であるが, ネストレ版本文では 35 版までは *αὐτοῦ* であったが, 26 版の改訂版以後 *σου* を採用している. また UBS 版は初版から *σου* と読んでいる.
 - 12) たとえば, アイスキュロス『コエフォロイ』565, 969; 『縛られたプロメテウス』912; ソフォクレス『オイディプス王』237; 『コロノスのオイディプス』426 など.
 - 13) サム下 3:10, エレ 22:30; 詩 132:11–18 など.
 - 14) 典型的な例は, W. R. G. Loader, *Sohn und Hoherpriester. Eine traditions-geschichtliche Untersuchung zur Christologie des Hebräerbriefes* (WMANT 53), Neukirchen-Vlyyn 1981 である.
 - 15) Ernst Lohmeyer, *Kyrios Jesus. Eine Untersuchung zu Phil 2, 5–11* (1927/28), Darmstadt²1961
 - 16) 『ギリシャ語 新約聖書釋義事典』I 教文館 1993, 201–202.
 - 17) ヘブル書の救済論的な面を強調しているのは, H. ヒュブナーである. cf. H. Hübner, *Bibliche Theologie des Neuen Testaments*, Göttingen 1995, Bd. 3, 20: *Christologie bleibt aber in sich aussageunfähig, wenn nicht gesehen wird, daß ihre innere Dimension Soteriologie ist. Aus der Trias “Theologie—Christologie—Soteriologie” darf kein Teil herausgebrochen oder auch nur abgewertet werden, ohne daß das Gesamte verzerrt würde. Theologie meint die “Lehre” von der *revelatio Dei in Christo* und Soteriologie die “Lehre” vom *Christus pro nobis crucifixus et resurrectus*. Der Hebr ist nun derjenige Brief im Neuen Testament, der so profiliert wie kaum ein anderes Schreiben dieses Ineinander von Theologie, Christologie und Soteriologie zum Ausbruck bringt Noch zugespitzt gesagt: Jesus von Nazareth ist der *Sohn Gottes*, nur deshalb kann er der *Hohepriester* sein und deshalb ist er es auch. Ist “Sohn Gottes” der christologische entscheidende Titel, so “Hoherpriester” der soteriologisch entscheidende.*

文 献

- H. W. Attridge, *The Epistle to the Hebrews (Hermeneia)*, Philadelphia 1989.
- F. Büchsel, *Die Christologie des Hebräerbriefes (BFchTh 27/2)*, Gütersloh 1992.
- E. Grässer, *An die Hebräer (Hebr 1–6) (EKK XVII/I)*, Zürich-Neukirchen 1990.
- R. A. Greer, *The Captain of our Salvation. A Study in the Patristic Exegesis of Hebrews (Beitr. z. Gesch. d. bibl. Exegese 15)*. Tübingen 1973.
- F. W. Grosheide, *De brief aan de Hebreënen en de brief van Jakobus (CNT [K])*, Kampen²1955.
- H. Hübner, *Biblische Theologie des Neuen Testaments*, Bd 3, Göttingen 1995.
- W. L. Lane, *Hebrews 1–8 (World Biblical Commentary 47A)*, Dallas 1991.
- W. Leonard, *The Authorship of the Epistle to the Hebrews*, Rom 1939.
- W. R. G. Loader, *Sohn und Hoherpriester. Eine traditions-geschichtliche untersuchung zur Christologie des Hebräerbriefes (WMANT 53)*, Neukirchen-Vlyyn 1981.
- E. Lohmeyer, *Kyrios Jesus. Eine Untersuchung zu Phil. 2, 5–11 (1927/28)*, Darmstadt²1961.
- B. M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, London-New York, 1971.
- O. Michel, *Der Brief an die Hebräer (KEK 13)*, Göttingen¹³1975.
- J. Moffatt, *The Epistle to the Hebrews* 1924.
- E. K. A. Riehm, *Der Lehrbegriff des Hebräerbriefes dargestellt und mit verwandten Lehrbegriffen verglichen*, Basel 1867.
- F. Schröger, *Der Verfasser des Hebräerbriefes als Schriftausleger (BU 4)*, Regensburg 1968.
- B. F. Westcott, *The Epistle to the Hebrews*, Grand Rapids, 1952 (= ²1892).
- H.-F. Weiss, *Der Brief an die Hebräer (KEK 13)*, Göttingen 1991